

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## マリカ・モカデム：砂漠からエクリチュールへ(前)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武内, 旬子, Takeuchi, Junko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/894">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/894</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# マリカ・モカDEM

## 砂漠からエクリチュールへ（前）

武内 旬子

### 目次

はじめに
第1章 テクストの砂漠
第2章 女の声と書く女
第3章 動くこと、書くこと
おわりに
参考文献

### はじめに

マリカ・モカDEM<sup>1</sup> (Malika Mokeddem) は1992年のあるインタビューで、あなたはだれかというジャーナリストの問いに「私は南の子、砂漠の娘です<sup>2</sup>」と答えている。5年後、別のインタビューではフランス語作家なのか世界の作家なのかという問いに対して「世界の作家であり、砂漠の作家<sup>3</sup>」であると自己定義する。アルジェリア西部、サハラの子の村ケナドゥサに1949年に生まれたモカDEMは1977年以來フランスに住んでいるのだが、砂漠を基準に自分の位置測定をしているように思われる。

もちろん、出身地が作家の仕事の全てを決定するわけでない。特にモカDEMの場合、反例をあげるのはたやすい。同じ地に数年後に生まれた男の子が、

---

1 筆者は別の論考で「モケDEM」と表記したことがあるが、本稿では、より原音に近いと考えられる「モカDEM」としたい。

2 in *Variété Magazine*, No.39, 5-11 juillet 1992. (Algérie)

3 in *Encres vagabondes*, No.10, janvier-avril, 1997. (France)

後にヤスミナ・ハドラという女性筆名<sup>4</sup>で書く作家となるのだが、彼の作品に砂漠は全く登場しない。(もっとも、早くに生地を離れ、地中海岸オランで育ち軍人になるという彼の経歴はモカデムのそれと著しく異なっている。)

砂漠、アルジェリア、女性、フランス語、移住などの要素は、しかし、「世界の作家」を何重にも条件付けずにはおかない。2001年6月にパリのアラブ世界研究所で行われた座談会<sup>5</sup>にこの二人の作家は同席したのだが、移住に伴うアルジェリアとの関係について、興味深い反応の違いをみせている。移住のもたらした解放を語るモカデムにハドラは、それでも「断絶」はなかったのではないかと対応した。これに対し、モカデムは出身社会での抑圧の厳しさを女性としてそれを経験した立場から強調し、「断絶」の存在をむしろ肯定的に認める発言をしたのである。ハドラもまたこの1年前からアルジェリアを出てフランスに住むことを選択している。その作品は90年代アルジェリア社会の暴力と腐敗を暴く仮借のなさにおいて、同時代のどの作家をも凌駕しているとさえいえる。それは、彼が軍人として、文字どおり命がけで暴力の現場を生きてきたという経験と無関係ではありえないだろう。社会の暗部を抉り出す「ハードボイルド」<sup>6</sup>な作風を得意とするこの作家が描く女性は、しかし、その他の部分と不釣り合いなまでに図式的である。モカデムがまさにその女性の問題をめぐって、彼女に「断絶」がもたらされねばならなかった理由を語る言葉は、少なくともこの討論の場では、同郷作家に通じたとは思われなかった。<sup>7</sup>

モカデムは「砂漠」の作家なのか、それともアルジェリアと「断絶」した

4 本名 Mohammed Moulessehoul。最初は本名で発表していたが後安全のために女性筆名 (Yasmina Khadra) を使い始める。

5 第6回ユーロ・アラブ・ブックフェアの一環行事として行われた座談会「新しいアルジェリア小説」。

6 ハドラはまず推理小説作家として知られるようになった。

7 もちろん、ハドラがアルジェリア社会と一切の軋轢を経験していないと言いたいのではない。自伝やインタビューからうかがえる、彼がこれまでの生涯のほとんどを過ごした軍との複雑な関係をも、モカデムの場合とはまた別の、「断絶」が存在するだろう。しかし、たとえば、マグレブの女性は家族の奴隷になっていないかという質問に、ハドラは、そうではなく女性は家族によって保護されているのだと答えたのに対し、モカデムは、私の戦いは第一に、家族・親族に対するものだったと答えた。この相違から、上述の断絶をめぐる発言へと続く。

作家なのだろうか。20年以上フランスに住み、この地でフランス語で書いた小説がこれまでに6作発表されているが、そのほとんどはアルジェリアを舞台としている。1990年の第1作『歩く人々』<sup>8</sup>（以下引用時はHMと略）は自伝的要素が非常に強い作品であり、作家自身の説明によれば、最初一人称の語りと実名を用いて書いたのち、三人称と想像上の名前に変え、フィクションとして書き直したという<sup>9</sup>。物語のほとんどは、砂漠の縁の村とその周囲で展開する。92年の『イナゴの世紀』<sup>10</sup>（以下SS）は、第1作以上に砂漠に根ざしたフィクションで、おとぎ話的側面を含んでいる。続く93年の『追われた女』<sup>11</sup>（以下I）、95年の『夢と暗殺者』<sup>12</sup>（以下RA）は同時代に設定され、イスラミズムとそれを生み出したアルジェリア社会を、特に女性に対する抑圧という視点から告発する激しい言説が目立つ。第5作『亀裂の夜』<sup>13</sup>（以下NL）で、再び舞台は砂漠に戻り、砂に埋もれつつある辺境の村を舞台として、前2作とかなり異なる静かな語りが見られる。2001年の『ンジド』<sup>14</sup>（NZ）では、初めて、アルジェリアは舞台とならず、主人公はアルジェリア人を母とするがこの地に足を踏み入れたことはない。同時にこの小説は、6作中唯一アラブ語のタイトルを持っている。全ての作品において主人公は女性だが、『イナゴの世紀』、『追われた女』の2作では、それぞれ一人の男性登場人物がヒロインにほぼ匹敵する位置におかれている。モカデムの関心の中心は女性の生のありかた、とりわけ「外」へと出た女性の生き様にある。「外」は必ずしも、アルジェリアに対するフランスを意味しない。『イナゴの世紀』や『亀裂の夜』の砂漠世界に生きる登場人物もまた「外」を経験するし、『歩く人々』のヒロインはフランスに渡るはるか以前から「亡命」を生きて

8 Malika Mokeddem, *Les hommes qui marchent*, Ramsay, 1990. 本稿における引用は Grasset から1997年に出た第2版を用いる。

9 c.f. "Entretien", in *Algérie Littérature/Action* (以下ALAと略), No.14, octobre 1997, p.188.

10 Malika Mokeddem, *Le siècle des sautrelles*, Ramsay, 1992.

11 ibid., *L'interdite*, Grasset, 1993.

12 ibid., *Des rêves et des assassins*, Grasset, 1995.

13 ibid., *La nuit de la lézarde*, Grasset, 1998.

14 Ibid., *N'Zid*, Seuil, 2001.

いる。さらに、最新作『ンジド』では物語のほとんどは外にして内なる地中海上で進行するのだ。砂漠から海まで、この女性たちの動きはどのような地図を描くことになるのだろうか。

アルジェリア出身女性作家としてはアシア・ジェバールがつとに知られており、文学的完成度という点でも一頭地を抜いている。長い間ジェバールがほぼ唯一の知られた作家だったのだが、90年代に至り、社会的危機の深まりの中から新しい女性の書き手が現れ、主として同時代のアルジェリア社会を生きる、あるいは生きのびる女性の証言としてのテキストが多数出版されるようになった。モカデムは、ちょうどジェバールと90年代作家との中間に位置している。第1作出版は90年だが、初期2作は90年代の危機とは直接の関係は持たない。次の2作が、まさにその渦中に書かれた作品である。これに続く2作は、前2作が持つ直接的な社会批判の言説を越えようとする新たな試みである。モカデムの作品に関する研究は、端緒についたばかりであり、ヨランド・アリス・ヘルムの編集した論文集<sup>15</sup>の他、2、3の例を除いては、紹介記事の域をでていない。この論文集はフランス語で書かれているが、執筆者の多くはアメリカの大学に属する研究者である。モカデム世界の様々な側面が論じられ、今後の研究を誘発するであろう貴重な仕事だといえることができる。しかも、後述するように、旧植民地地域で、あるいはその地域出身の作家によって書かれる文学、とりわけ女性作家の作品を読む際に、あらかじめ読者が持つてしまう期待と実際のテキストとのずれを考える上で、興味深い例をも提供している。

本稿ではモカデムの現在までの作品の全体を対象とし、砂漠から海までのテキストの行程をたどりつつ、いくつかの論点をあきらかにしたい。第1章は、モカデムの書く砂漠の特徴がどこにあるのか、フランス文学がこれまでに書いてきたそれとどのように異なっているのか、マグレブフランス語表現

---

15 Yolande Alice Helm ed., *Malika Mokkedem. Envers et contre tout*, L'Harmattan, 2000.

作家の例との対象も含めて検討する。第2章は、女性を書くテキストとしてモカデム作品を読み、文字ではなく口承によって経験や思想、また想像を伝えてきた女性たちと「書く女」との関係に焦点をあてる。第3章では、アルジェリアとフランスという二項対立、その狭間という閉塞状況をこれらのテキストがどのように書き、また書くことでどのようにそれをつくりかえていくのかを探りたい。

## 第1章 テキストの砂漠

### 1-1 サハラとフランス文学

フランス文学に砂漠をもたらしたのは砂漠地帯出身の作家ではない。そうした作家の出現を待つまでもなく、砂漠はすでにこの文学の人気テーマの一つとすら言える位置を占めてきた。砂漠、とりわけサハラを語る数多くの作品<sup>16</sup>が存在するのだが、アンソロジーの一つを編集したモニック・ヴェリテによると「この文学は他者についてよりもフランス人について多くのことを教えてくれる<sup>17</sup>」という。では、モカデムの砂漠は、何を教えてくれるのだろうか。

ところでマグレブの砂漠は、フランス人の想像界に存在した最初の砂漠ではない。フランスに限らず西洋世界にとって、砂漠とは何よりもまず聖書に現れるそれである。しばしば指摘されるようにフランス語は、これに関連する新旧聖書の様々な用語を“désert”の一語で訳してきた。シャトーブリアン、ラマルチーヌからロティに至るまで、後に聖地に出かけたフランス人作家にとって、中東の砂漠は始めから聖書的意味と不可分である。とりわけそれは、隠棲の場、試練や瞑想を通して神とのコンタクトを得る場であり、現実に砂漠やその周辺に生きていたわけではないヨーロッパ人にとって、「神

---

16 本稿では、文学作品の作家による、紀行文、ルポルタージュ、フィクションのみを考察対象とするが、研究者や编者によって、作家以外の探検家、科学者、軍人などによるテキストも「文学」のカテゴリーに含めている場合もある。

17 Monique Verité, *Le Sahara*, Favre, 1999, p.28.

と人間の仲介としてのみ存在する抽象的空間<sup>18</sup>であったといえるかもしれない。

フランスにとって砂漠がより具体的空間となるのは主に19世紀である。ナポレオンのエジプト遠征、ルイ・フィリップ政権下のアルジェリア征服が果たした役割は決定的となるだろう。砂漠を含むオリエント世界が、想像から現実へと場を移し<sup>19</sup>「ファンタズムと経験の結合が可能<sup>20</sup>」になったのである。文学のオリエンタリズムも19世紀に本格化する。ここでは名をあげるにとどめるが、上に引いた作家以外にも、自らはオリエントを全く経験することなく『オリエンタル』を書いたユゴー、実際に出かけて中近東の砂漠も見ているフロベール、ネルヴァル、ゴーチエなど、「オリエンタリズム」だけで知られているわけではない作家のみを数えても枚挙に暇がない。また一度も砂漠に足を踏み入れずに、砂漠（エジプト）での牝豹とフランス人兵士の「恋愛」を書いたバルザックがいる。この短編『砂漠の情熱』において砂漠は何よりもエロスの場として現れる。オリエンタリズムの基本的傾向であるオリエントの女性化、エロス化は、ここでは、女を動物にすることで夾雑物（言語、人間的思考や感情など）抜き「純粹にエロチックな他者」を生み出すに至っている。なお、舞台はナポレオン遠征時のエジプトだが、発表された1830年はフランスのアルジェリア侵略の年である<sup>21</sup>。

マグレブの砂漠も19世紀を通して近いものとなっていくが、それと関連するこの世紀の作家でよく知られているのはたとえばフロマンタンやモーパッサ

18 Michel Roux, *Le désert de sable. Le Sahara dans l'imaginaire des Français (1900-1994)*, L'Harmattan, 1996, p.22.

19 もちろんこれ以前から見聞記、旅行記などは存在するし、フィクションの舞台ともなっている。これらに関する研究も多く存在する。

20 Jean-Robert Henry, "Le désert nécessaire", in *Désert, Autrement*, No.5, 1983, p.20.

21 Balzac, *Une passion dans le désert*, (1830), Gallimard, Pléiade Tom VII, 1977. 芳川泰久は『闘う小説家バルザック』（せりか書房、1999年）において、この短編を、同時期に発表された『サラジヌ』、34年から35年の『セラフィータ』『金色の眼の娘』と比較し、人間と動物、人間と天使、男と女という分断線の乗り越えの試みとその挫折の物語という共通項を取り出す興味深い分析を行っている。そしてこれらの作品を「フーコーの言う、博物学的な分類に依拠した古典主義時代の知に切断をもたらず契機としての解剖(141ページ)」という意味での「解剖小説」と名付けている。

22 フロマンタンの『サハラの日』（Eugène Fromentin, *Un été dans le Sahara*, Gallimard, Pléiade, 1984. 1854年に雑誌 *Revue de Paris* に発表された後1857年に単行本として出版。）

サン<sup>23</sup>であろう。20世紀では、ジッド<sup>24</sup>やカミュ<sup>25</sup>、サンテグジュペリの名が必ず引かれることになる。

しかし、こうした文学史上重要作家として扱われ、よく研究される例以外に、特に20世紀前半、大衆的成功をおさめ、サハライメージをフランスの読者層に広めるのに一役買った文学が存在する。冒険小説的なものが多く、今日、文学的価値から研究されることはほとんどないが、より広い層の人々に砂漠をもたらしたのはむしろこちらの方なのだ。たとえばピエール・ブノワ『アトランティド』<sup>26</sup>(1919年)やジョゼフ・ペイレ『白い騎兵隊』<sup>27</sup>(1934年)などは、それぞれ、アカデミーフランセーズ賞、ゴンクール賞を受賞し、ベストセラーとなった。本論では作家研究で取り上げられてきた主流の作品で

---

は、フランス文学でアルジェリアの砂漠が本格的に描かれた初期の例の一つである。フロマンタンは1846年に初めてアルジェリアを訪れている。その後、47年から48年、52年から53年にも長期逗留、砂漠地方へ出かけたのはこの2回の長期滞在時であり、『サハラの夏』に描かれるのは主に53年の旅である。このテキストは画家でもあるフロマンタンの優れた描写力を伺わせるものだが、滞在先のオアシスの住人とはほとんど関係を持たない。自らが住人たちに受け入れられたわけではない「他者」であることを作家は明確に自覚している。たしかに好奇心はともなっているが、後の多くのサハラ文学に見られるような「現地人」への傲慢なまなざしは少ない。アルジェリア滞在から生まれたフロマンタンの作品については Guy Barthélemy, *Fromentin et l'écriture du désert*, L'Harmattan, 1997 に詳しい。

23 モーパッサンはジャーナリストとして南部を含めたアルジェリアを訪ねた1881年以後も繰り返し(計4回)マグレブを訪れている。この作家にとっては、過去や歴史の意味にあふれたオリエントより、彼の考えるところの「過去のない原初的」世界であるアフリカの方が好ましい。なかでも砂漠は「そこではしかし、人は何も欲望せず、何も求めない。この、静かな、光にあふれて荒涼とした光景だけで、目にも思考にも十分であり、感覚と夢想を満たすのである。なぜなら、それは完全であり、絶対なのだから」(Maupassant, *Au soleil*, in *Ecrits sur le Maghreb*, Edition présentée par Denise Brahimi, Minerve, 1991, p.81) というように、彼を魅了する究極の形である。同じテキストには植民地政策批判も欠けてはいないのだが、植民地化そのものの批判ではなく、その方法の「不公正さ」を突くのみであり、フランス植民地主義の看板であった文明化という使命自体を疑う節はみられない。

24 マグレブの地におけるジッドの「自己発見」はあまりにも有名でありここで繰り返す必要はないだろう。砂漠の光と熱という「定番」に加え、オアシスとそこで出会う人々が重要な役割をはたす。ビスクラを始めとするこの地方への言及は主として『地の糧』『一粒の種もし死なずば』『背徳者』などに見られる。

25 カミュの場合アルジェリアに生まれ育ったという点で上述の作家と異なるとはいえ、そのアルジェリアは主に地中海世界のそれであり、砂漠はいつくかの作品に現れるが、全体としてカミュの主要テーマとはいえないだろう。実際にサハラに出かけたのは1952年12月、ごく短期間ラグラト、ガルダイアを訪れた時のみ。作品としては『追放と王国』中の短編「不貞」には砂漠が女性主人公の内面を思いがけず「解放」する契機として表れる。なお、この砂漠は熱ではなく寒気の相のもとに表現されているが、カミュの砂漠体験が冬だったことと関連しているのではないだろうか。

26 Pierre Benoit, *L'Atlantide*, Albin Michel, 1919. Edition de référence, 1993.

27 Joseph Peyré, *L'escadron blanc*, Grasset, 1934.



はなく、こちらの例のいくつかに注目し、多くのフランス人読者が砂漠として読んだのが何であったのかを考えたい。

ジャン＝ロベール・アンリによると、砂漠を語る文学を読むと「砂漠を生きるには二つの方法がある<sup>28</sup>」ことがわかるという。言い方を変えると、内面を啓示するものとして砂漠を書く文学と、挑戦し、征服して所有すべき空間として書く文学が存在する。今日まで評価されるような作品が主に前者に対応し、ペイレなど軍事・冒険小説の系統は後者に属する<sup>29</sup>が、砂漠に恍惚とし、自己探求に苦悩あるいは歓喜してられるのも、軍事的バックアップあってこそだという事実を、後者のような「大衆文学」は教えてくれる。フロマンタンが滞在したラグアトは激しい戦闘を経て軍事占領されてからまだ6ヶ月しかたっていない場所であるし、モーパッサンが強い反軍感情の持ち主であったとしても、南部への旅は軍の移動に便乗する形でしか実現しない。そして、軍事・冒険タイプのサハラ小説は両大戦間、つまりサハラにとどまらず、世界におけるフランスの植民地主義が頂点に達する時期に数多く書かれ読まれるのである。

また、砂漠の住人が、時代のイデオロギーに強く支配された形ではあるが、単なる風景の一部としてではなく描かれるのは、皮肉なことにむしろこちらのタイプの小説においてである。自己探求タイプのテキストが「自己（フランス人）」と環境（自然）としての砂漠、あるいは自己発見の役に立つ限りでの「現地人」を書くことに集中しがちなものに対し、サハラ冒険小説は、もちろん基本的にはフランス人の都合に合わせてではあるが、「現地人」に行動させる。そのほとんどは、敵にせよ味方にせよ戦士（男性）なのだが、ブノワの小説では、中心人物および語り手がフランス人軍人なのに対し、ヒロインにあたるのは謎めいた砂漠の女王、「ファムファタル」オリエント版で

28 Jean-Robert Henry, op.cit., p.17.

29 こうした小説にも、砂漠を契機とした自己発見という要素が欠けているわけではない。主人公は多くの場合軍人だが、作家や芸術家とは異なる方法で自己探求を行うとも言えるかもしれない。

ある。女性とオリエントをめぐるファンタスムの結合自体はめずらしくもないが（むしろだからこそ大衆的成功を収めるわけだが）植民地主義の現実（ヨーロッパによるサハラ<sup>30</sup>の軍事支配）がオリエンタリスト的ファンタスムを支えていることを、『アトランティド』ははっきり示している。抗しがたい官能性を武器に次々ヨーロッパ人軍人を死に至らしめる女王アンティネアは「結局少数民族の大儀を擁護しているものであり、その行為はフランスによるサハラ<sup>30</sup>の植民地化に対するトゥアレグ人の抵抗の例証なのだ」と読むことは全く不可能というわけではないかもしれない。主人公は最終的にこの女王の魅力に屈服するのだから。しかし、ファミファタルの「権力」が性差別からの解放を意味しないのと同じように、『アトランティド』を支配する想像力はトゥアレグの民族自決権を顕揚したりはしない。（そもそもサハラ<sup>30</sup>のこの地域においてトゥアレグは「少数民族」ではない。彼らを少数派として位置づけるのはまさに帝国主義イデオロギーの側である。）右翼ナショナリストとしてのブノワの一貫した政治的傾向は、ごく初期に属するこの小説にも見られ、武力による植民地拡大と支配を正当化し、それに横やりを入れる議会や人権宣言の建前を揶揄する箇所がある<sup>31</sup>。ミイラ化して並べられた愛人たちを観賞する女王が、愛と死の不可分性の表象という面をもつのは明らかだが、ここで全面的に援用されているのは、なんと言ってもオリエンタリスト的残酷さと官能性の結合という図式に他ならない。たしかに登場人物の一部が魅惑されて死に向かうとしても、この伝説のオアシスを含む広大で未だ謎に満ちた砂漠を所有しているのは今やアンティネアではなく、エキゾチックな魅力に胸躍らせながら彼女の物語を読む、もしくは書く側なのである。テキストにちりばめられた術学的知識のかけらは、およそ空想的なこの物語にリアリスティックな幻想の衣装をまとわせるだけではない。現在軍事的に優位に立っているのみならず、知によってもこの地を所有するのがだれであるかを（この地

30 Chantal Fouquier, "Introduction" à *L'Atlantide*. Edition Livre de poche, 1994, p.27.

31 c.f. Benoit, op.cit., pp.41-42.

の歴史の真実を握っているのは現地人ではなくヨーロッパ人なのだ) 指し示すのである。

長くフランス人のサハラをめぐる想像力に影響を及ぼす『アトランティド』<sup>32</sup>では女性が重要なテーマになっているが、『白い騎兵隊』始め、多くのサハラ小説は、圧倒的に男性の世界を描く。そこでは「現地人」も観察や欲望の対象以外に、戦士として一定評価されることがある。これらの小説で「サハラ人 (Saharien)」という表現はフランス人軍人と現地人の双方を含んでおり、前者はむしろフランス本土やアルジェリア北部の同国人よりも、好んでサハラ人として自己定義する。<sup>33</sup>フランス軍に編入された現地人がこれらの小説には必ず登場し、厳しい気候条件のもとで勇敢に戦う戦士として評価される場合も多い。さらに、敵としても、ヒロイックな戦士としては同列に評価されることもある。もちろんだからといってヨーロッパ人の優位がゆらぐわけではいささかもない。あくまで、上にたつのはヨーロッパ人である。ただ、こうした「マッチョな」サハラ小説の主人公たちが男性的とみなす価値(勇気、忍耐、節制、孤独に耐える力など)は、しばしばヨーロッパでは失われ、砂漠にこそ保存されているとされ、この点、「空色の軍帽を、頭と首筋をターバン状に覆う青いヴェールにかえてしまえば、彼(フランス人将校)と伝統的マントを付けたこの男たち(現地人)とを区別するものは何もない」<sup>34</sup>というようにサハラ人は出身を問わずその価値を共有するのである。

両大戦間という同時期に出版され、これまた非常によく知られたサンテグジュペリやケッセルの「飛行機冒険文学」もサハラ文学のカテゴリーに含む

---

32 たとえば1950年出版の小説にもアンティネアへの参照が見られる。C.f. Frison-Roche, *La piste oubliée*, Arthaud, 1950, p.14. なお、ブノワの小説にも、先立つサハラ文学への参照が見られ、中心人物の一人がフロマンタンとモーパッサンの名をあげるのだが、彼らが経験したのは本物の砂漠ではなくほんの砂漠の入り口にすぎないとして嘲笑するためである。Benoit, op.cit., p.33.

33 歴史的事実として、サハラの軍事侵略を進めようとしたフランスは、この砂漠の地理的・気候的条件を克服するために、フランス植民地軍の中で唯一、現地人のスタイル(服装から移動方法まで)を取り入れた部隊メハリスト(駱駝-メハラーに乗る騎兵隊)を編成することを余儀なくされた。C.f., Daniel Grévos, *Les méharistes français à la conquête du Sahara 1900-1930*, L'Harmattan, 1994.

34 Peyré, op. cit., p.34.

ことができるのだが<sup>35</sup>、こちらにあらわれる地上の現地人は<sup>36</sup>、事故にあつて不時着した飛行士を人質にとって金品を得ることしか考えていないかのごとくである。自分たちは自由なつもりでいる地上の「野蛮人」のはるか上空を、文明の申し子であり、かつヒロイックな精神の持ち主である男たちが<sup>37</sup>飛んで行く構図は、たとえ彼らが民間人であり直接植民地支配の尖兵ではないとしても、かえって軍人と現地遊牧民との関係よりはっきりと、文字通りの上下関係をつくりだす。駱駝を必要とする限り、たとえ支配対象の「野蛮人」であっても、彼らの知識や経験は不可欠だが、飛行機や自動車<sup>38</sup>といった文明の利器は、力関係をさらに決定的なものにする。支配者は今や現地人に習って「偽装」（たとえばメハリスト）する必要すらないのである。さらに飛行機の視点は、とりわけサンテグジュペリの場合顕著だが、高さとメカニックのコントロール能力からくる全能感をもたらし、砂漠とその住人は、この「神」の自己満足を映す鏡ともなるのである。

20世紀初頭にアルジェリアの砂漠と出会った作家として、直接モカデムと関連するのはイザベル・エベルハルトである。『イナゴの世紀』にこの名が引かれる箇所については後述するが、唯一の例ではないといえ、やはりこの女性はサハラ文学の書き手としては珍しい部類に属する<sup>39</sup>。すでに19世紀以来オリエント世界に足を踏み入れたヨーロッパ女性で文章を書いた例は少なくないが<sup>40</sup>、フランス語によるサハラ文学に限っていえば、最もよく知られてい

35 最もよく知られたものとして Antoine de Saint-Exupéry, *Terre des hommes*, Gallimard, 1939, Joseph Kessel, *Vent de sable*, Edition de France, 1929 など。

36 ここでは大西洋沿岸に近い砂漠地帯の遊牧民。ペイレ他の小説ではアルジェリア南部の砂漠の遊牧民。

37 この文学世界もきわめてはっきりと男性中心である。

38 上述の Frison-Roche の小説は1928年に時代設定されており、物語の大半をしめるのは駱駝で移動するキャラバンだが、冒頭には自動車が登場し、軍隊への自動車部隊導入の主張が出会う抵抗が示唆される箇所がある。Frison-Roche. op.cit., p.23.

39 Henryの論文中、エベルハルトは、引用された作家の中で唯一の女性である。なお、ここには引用されていないが、主にモリタニアのサハラに旅をして書いたブルターニュ出身の女性オデット・ド・ピュイゴドは長らく忘れられていたが、90年代以降作品の再出版と再評価が進行中である。C.f. Monique Vérité, *Odette du Puigau*, Editions Jean Picollec, 1992.

40 女性史、旅行文学、オリエンタリズム研究などの各分野で女性旅行家研究は行われている。C.f., *L'Exotisme au féminin, Les Carnets de l'exotisme*, nouvelle série No.1, 2000, Editions Kailash et Editions le Torii.

るのが、何といってもこの、ドイツ系の名前を持つスイス生まれのロシア人フランス語作家であることは間違いない。その作品(日記, 旅行記, 中短編小説など)より, イスラムに改宗しアラブ風の男装をして砂漠を馬で駆けめぐり, 若くしてその砂漠で溺死するというドラマチックな人生のほうがよく知られ, 小説や映画の題材にもなり, 作品研究より伝記<sup>41</sup>の方が多様なエベルハルトはまたフェミニストのイメージにもつきまとわれている。生前に発表された文章はわずかであり, 死後出版にも編者の手が加わっていたこともあって, 原稿に基づいた全作品集が刊行されたのは第1巻が1988年, 第2巻が1990年にすぎない。モカデムが参照するのも, 自由に動き回り, ものを書いた女性としてのエベルハルトであり, 作品自体への言及はない。伝記よりテキスト分析を重視するドゥニーズ・ブラヒミは, エベルハルトのテキストから見えてくるのはむしろ, 自分の母をのぞく女性への嫌悪と軽蔑であり「一見しただけでイザベルをフェミニストのヒロインにしてしまうという誘惑に対して警戒する必要がある<sup>42</sup>」と述べている。実際, アラブ語を話し, ヨーロッパよりアルジェリア南部のイスラム社会の方に自分にあった世界を見出すといいながら, アルジェリア人女性について書かれたものは少なく, 関心や, ましてや共感を推察させるようなテキストを見出すのは難しい<sup>43</sup>。そのイスラム理解についても, 宗教的というより, 彼女がイスラム教徒に見出したと考えるある種の人生観(「イスラム的諦念」と彼女が呼ぶもの)への接近の欲望に促されてのものであり, また他者理解というより, ヨーロッパ近代文明への嫌悪から来る反動という面が強い。男装したヨーロッパ人女性であることで初めて可能になるこの地での自由を何よりも評価するエベルハルトには, イスラム教徒を標榜しながらも, 現実に目の前にいたはずの南部アルジェリアのイスラム教徒女性—モカデムの祖先の女性たち—の生き方を引き

41 代表的なものとして Edmonde Charles-Roux, *Un désir d'Orient*, Grasset, 1988 et *Nomade j'étais*, Grasset, 1995.

42 Denise Brahimi, *Requiem pour Isabelle*, Publisud, Paris, 1983, p.83.

43 数少ない, アルジェリア人女性を主人公にした小説においても同様である。たとえば *Yasmina*, in *Ecrits sur le sable, Oeuvres complètes Tome II*, Grasset, 1990, p.94.

受けるつもりは毛頭ないのである。もちろん、このことからただちにエベルハルトの作品を無意味だと切り捨てる必要はない。時代の限界とともにあるのは彼女だけではないのだから<sup>44</sup>。ただ、モカデムによる引用も含め、エベルハルトの「イメージ」先行については、ブラヒミのいうごとく警戒しなければならぬだろう。

植民地、とりわけアルジェリアの独立後、支配し所有すべき対象でなくなった砂漠は、一時期フランス文学のテーマ群からはずれるが、70年代後半から再び姿を現す。独立後のアルジェリアはマグレブの他の2国と異なり観光促進の方向は選択しなかったし、またフランスとの軋轢の多い関係も、この国に多くのフランス人観光客を呼び寄せる働きはしなかった。例外はサハラである。交通手段の発展とともに砂漠（アルジェリア南部も含む）観光は魅力的なバカンス、手軽かつスリリングな冒険旅行として人気が高い<sup>45</sup>。また高度な写真技術による美的完成度の高い砂漠写真集も続々出版され、ノエルの時期などには贈り物用豪華本の筆頭に必ず登場する。旅行記や一般向け科学書、歴史書も数多い。ルネ・カイエやシャルル・ド・フーコーといった探検家や「隠者」の伝記、研究書も根強い人気を保っている。単にエキゾチックなだけでなく、美しいが厳しい自然条件のもと、新たな自己に生まれ変わるイニシエーションの場という砂漠神話は健在である。本稿でも参照する特集雑誌『オートウルマン』の『砂漠』と題する巻（1985年刊）の副題は「ノマド、戦士、絶対の探求者」である。前二者が現実には大きく変貌を遂げた20世紀終わりになっても砂漠の「イメージ」形成には不可欠であり、神から自己まで、探求にはやはり砂漠がおあつらえ向きであることを、砂漠をめぐる各種の言説は語り続けている。

44 この点、Henry の論文が他者理解の不十分性や時代の限界について、他の男性作家にもあてはまることを、そこではとりあげず、とりわけエベルハルトについて強調していることは、彼女が、参照される唯一の女性であることと考えあわせて注目に値する。

45 上に引いた Roux の著作には砂漠観光案内パンフレットの用いる語彙や写真についての興味深い分解分析がある。c.f. Roux, op.cit., p.121-142.

フィクションの分野でも、植民地期に時代設定され、強い色彩とパシオンを謳い文句にした砂漠冒険文学がいまだ存在するだけでなく、「本格的」作家の作品にも砂漠は登場する。たとえば、ミシェル・トゥルニエの『黄金のじずく』<sup>46</sup>（1985年）では表象のテーマを語るのに、西洋近代の対極点として砂漠が選ばれている。しかし物語の中心は砂漠を出てきた少年の、西洋近代文明下での生活である。

『砂漠』<sup>47</sup>（1980年）を書いたル・クレジオにとって砂漠はすでにおなじみの空間と言ってよく、これに先立つ作品にはアメリカ大陸の砂漠を始め様々な砂漠的空間が現れる。『砂漠』は、ヨーロッパによる西サハラ侵略とそれに対する遊牧民の抵抗の歴史（20世紀初頭）を實在の人物をまじえて語る部分と、執筆と同時代に設定されたフィクションとが交代する形をとっている。<sup>48</sup>物語は、ほぼ一貫して砂漠の住民（主としてそこから追われた人々）の視点から語られ、その点これまでに引用してきたフランス人作家たちのテキストと異なる。ル・クレジオはフランス生まれのフランス人であるが、かつてブルターニュからレユニオンへ移民し、島の支配者の変動からイギリス人となった祖先をもち、「他所」をエクリチュールと密接に関連させてきた作家である。『砂漠』で今度は、自身ではなく配偶者の祖先の地西サハラが、過去と現在の双方において、また砂漠世界とヨーロッパとの関わりにおいて多面的に語られる。作家の選択（婚姻）によってつながることになった、いわば養子縁組によるオリジンを介して、フランス語が西サハラを「内側」から書こうとする試みであるということもできるだろう。ただしそれは、歴史的事実が参照されているとはいえ、なによりもまずル・クレジオの想像世界のシェーマに忠実なエクリチュールであり、また本稿で概観してきたテキストが描く砂漠のイメージを大きく変更するものではない。

46 Michel Tournier, *La goutte d'or*, Gallimard, 1985.

47 J.M.G.Le Clézio, *Le désert*, Gallimard, 1980.

48 後者の主人公は大西洋岸の砂漠地帯からいったんマルセイユに渡るが後再びオリジンの地に戻る。

## 1-2 マグレブ作家による砂漠

ここまで、ヨーロッパ人作家のテキストにしぼって検討してきたのだが、では20世紀後半から書かれてきたマグレブ作家によるフランス語表現文学は砂漠をどう扱ってきたのだろうか。地中海を渡って砂漠へ向かった作家と、「内側」の作家とでは違うのだろうか。カミュは海を渡る必要がなかったが、初めて砂漠と接触するのは39歳になってから、しかもきわめて短期間の旅行のみである。ブノワの場合、生まれはフランスだが少年期をアルジェリアとチュニジアで過ごし、サハラで兵役を務めている。しかし、どちらにせよ砂漠へ「行った」ことに変わりはなく、また他の作家に比べて、こうした経歴から砂漠に関して顕著な違いが彼らのテキストに読みとれるとは言い難い。マグレブ出身作家の場合も実は、砂漠に「行く」構造は変わらない。マルソー・ガストが指摘するように「書かれた文学においては、西洋人であろうと東洋人であろうと砂漠について表現してきたのはほとんど常に都市のエリートであった。<sup>49</sup>」カビリー出身のムールード・マムリも遅くになって砂漠を発見するが、そのエッセイの中で「よく知られていることだが北のマグレブ人は特にサハラに惹かれてはこなかった。(中略)石油以前には砂漠についてむしろ、ほんやりとした、しかし惹かれることを思いとどまらせるような不安をさえ抱いていた<sup>50</sup>」と述べている。チュニス生まれのアルベール・メンミも、『砂漠』と題する小説の著者ではあるが、実際の砂漠とはわずかなコンタクトの経験しか持たず、むしろ悪い思い出、恐怖感の対象だという<sup>51</sup>。マムリによれば、物理的には砂漠が広がっているにもかかわらず、価値観や生活様式では、南が北に飲み込まれつつあるという<sup>52</sup>。砂漠はマグレブフランス語文学の中で、非常に大きな位置を占めているとはいえ、比喩的に使われる場合は別として、現実のサハラが具体的に現れる例は、そう多くはない。ここで

49 Marceau Gast, "Mutations sahariennes", in *Désert, Autrement*, No.5, p.66.

50 Mouloud Mammeri, "Ténéré atavique", *ibid.*, pp.211-212.

51 2001年4月19日、アラブ世界研究所(パリ)で開催された講演会(「砂漠から書く」)での発言。

52 Mammeri, *op. cit.*, p.217.



はそのいくつか（マムリ、メンミ、ブージェドラ、ジャウト）を検討するが、全体として「北」の人間が「南」で自己発見するという、フランス人作家のテキストと同じパターンが認められる。<sup>53</sup>

メンミの『砂漠 もしくはジュバイル・ウアリ・エル・メンミの生涯と冒険』<sup>54</sup>は語り手の先祖の自伝という形をとった小説で、設定年代は14世紀末だが、題名にもかかわらず、砂漠が現れるのは冒頭のみである。若年の主人公が追放された先が砂漠であり、彼にとってこの空間はまさに、その後の人生を準備するゼロ地点、イニシエーションの場として機能する。

マムリ、ブージェドラ、ジャウトの3作では、語り手や中心人物は現代人であり、かつサハラ出身ではない。マムリの『横断』<sup>55</sup>では、主人公であるアルジェリア人ジャーナリストが、フランス人女性の石油基地視察に同行する形で砂漠を「典型的に」発見する。視察旅行の同行者たち（アルジェリア人、フランス人、男性、女性、共産主義者からイスラム原理主義者まで）は、「砂漠の狂気」に接触することで、それぞれそれまでの自己認識の変更を迫られる。この小説はしかし、砂漠行による個人レベルでの自己発見物語と独立アルジェリアに対する社会批判が結びつくことで、フランス人作家による作品とは一線を画している。ラシド・ブージェドラの『ティミムン』<sup>56</sup>はサハラの都市名を題名にしている。語り手はアルジェリア北部から観光客を砂漠に案内するガイド兼バス運転手で、砂漠は彼の場合、むしろ逃避と自己破壊の場として選ばれているかのような印象を与える。しかし、小説は、あるツアーからの帰途、自らの同性愛を発見するところで終わるのであり、テクス

53 なお、その前に詩人の例を一つだけあげておくと、エドモン・ジャベスの諸作品には砂漠に関するアフォリズムが、それこそオアシスのように点在する。ただし、フランス語で書くエジプト生まれのユダヤ人詩人にとっての砂漠は、体験を経ているとはいえ描写でもフィクションの要素でもなく、生、死、全、無といった抽象的概念の祖形とでもいべきものを成す。また、信仰と直接関連するわけではないとはいえ、ジャベスの詩的世界では砂漠と「本」はユダヤ教を通して分かちがたく結びついている。砂漠とユダヤ的想像力の問題という大きなテーマについては、まったく別の論考が必要になるだろう。

54 Albert Memmi, *Le désert ou la vie et les aventures de Jubair Ouali El-Mammi*, Gallimard, 1977.

55 Mouloud Mammeri, *La traversée*, Plon, 1982.

56 Rachid Boudjedra, *Timimoun*, Denoël, 1994.

トの大部分を構成するその砂漠ツアーは、結局自己発見の契機というクラシックな役割を担っているのである。

上に述べた3作が語りの構造としては比較的単純なのに対しタハル・ジャウトの<sup>57</sup>『砂漠の発明』<sup>58</sup>はアルモラヴィダ（ムラービト）朝の歴史を書こうとする語り手の現在、過去、曾祖父の伝記、書きつつあるテキストなどが複雑に折り重なっている。砂漠も前3作のように、あらかじめ与えられているのではなく、重層的に語りの中で形をとっていくのであり、また必ずしも一つの像を結ぶわけでもない。が、「私が南下するのは逃避したり、新奇な感覚を求めてのことではない。それはむしろ自分の内部を見つめる一つの方法なのだ」<sup>59</sup>というように、基本的に、砂漠に自己を見つめる場を想定する構造は存在する。出発地点が北にある限り、砂漠についてのエクリチュールと自己発見との強固な結合パターンはくずれないようである。ただ、ジャウトのテキストは、語り手自身の子供時代に直接つながっていないとはいえ、個人的（曾祖父の伝記）集団的（マグレブの歴史）祖先を通しての複線的つながりをこそ語っているのであり、その点、出身社会へ戻ればいったん砂漠と切れてしまうヨーロッパ出身者の砂漠語りとは異なる。自らの生きる社会の歴史が砂漠と「地続き」である場合、その砂漠との関係は常に「発明」していかなければならない何かなのだといえるのかもしれない。

### 1—3 砂漠から出る

では砂漠へ「行く」ことのない作家はどのような関係を「発明」するのだろうか。

モカデムはこれまでのところ全ての作品に砂漠を書き込んでいる。語りの

---

57 1991年、ジャウトとモカデムは同時にヌディン・アバ財団賞を受賞した。その後1993年にジャウトは暗殺され、同年に出版されたモカデムの『追われた女』はジャウトへの献辞を伴っている。

58 Tahar Djaout, *L'Invention du désert*, Seuil, 1987.

59 Ibid., p.27.

他の要素と密接に絡み合っているので、砂漠だけを独立してとりあげることは難しいが、本章では、上に見てきたテキストに共通するいくつかのクリシェと、モカデムの砂漠とを比較したい。

砂漠に隠棲した宗教者のみならず北から南下したほとんどの著者にとって砂漠は「孤独」の場である。しかし、遊牧民にせよ、オアシスの住人にせよ、現実に厳しい自然条件のもとで生き延びるのは個人ではなく集団であり、とりわけ女性には「孤独」は許されない。自伝的性格の強い『歩く人々』の主人公が住むのは、砂漠の縁の村の、そのまたはずれ、砂漠に直面する孤立した家だが、その小さな家は人間であふれている。両親、祖母、叔父（後にその妻と子供たち）、および次々生まれる12人の弟妹に囲まれ、4歳の時にはもう家事育児を担っていた長女レイラの視点から書かれる生活は、孤独な隠棲者のそれと同じというわけにはいかない。レイラの家族が父の世代で定住化した遊牧民であるのに対し、『イナゴの世紀』にはまだ移動生活を送る人々が登場し、それは二つのカテゴリーにはっきり分かれている。一つは、中心人物マフムド、ネジュマの夫婦とその子供たちであり、彼らは当初4人の核家族で、ネジュマと男の子が死んでからは父娘二人きりで家畜を追う。これに対し、回想で語られるマフムドの一族、および物語の現在でヤスミンが一時預けられる先は、部族単位で移動する遊牧民である。この二つが伝統的構成であるのに対し、マフムドと娘の生活は人々のうわさになるほどの、きわめて珍しい例外とされる。この2作は同時期に執筆されており、自伝的エクリチュールの要請から逃れてフィクションの自由を試みる機会でもあったようである。<sup>60</sup>『イナゴの世紀』の二種類の遊牧生活も、伝統的大家族のそれがメンバーによる相互監視と、とりわけ女性への抑圧という側面をもつのに対し、現実にはあり得ないかもしれない孤立と自由が、もう一つのカテゴリーで試みられた結果といえるかもしれない。そして、その「砂漠の孤独」は代償として悲劇を伴うことをこの小説は語っている。なお、孤独と関連して沈

60 Malika Mokeddem, "Entretien", in *Algérie Littérature/Action*, No.14, 1997, p.188.

黙あるいは静寂も、砂漠の代名詞の感がある。<sup>61</sup>モカデムの砂漠も沈黙に欠けてはいないが、同時にそれは、語り部の声が住む空間でもあり、戦時には爆撃の音に満たされる。

出身社会といったん断絶して真のあるいは新しい自己を発見する場という機能についてはどうだろうか。おそらく、モカデムの砂漠がラディカルにこの図式と異ってくるのはこの点においてである。「開かれた、しかし無に対して開かれた広大な空間を前にした幽閉の感覚ほどひどい閉塞感はない(HM 274)」という『歩く人々』の語り手にとって砂漠は自己解放の場であるどころか、そこから逃げ出すべき牢獄に他ならない。「私は砂漠を憎んでいました<sup>62</sup>」と作家は言う。砂漠に閉じ込められるという絶望感は『歩く人々』でも、作者の各種インタビューでもライトモチーフのように繰り返し現れる。『夢と暗殺者』の語り手はアルジェリア北部の出身だが、砂漠の親戚に預けられる夏休みは、最悪の監禁状態として受け取られる。だが、閉塞感の理由は、砂漠という地理的空間そのものにあるのではない。そこに住む女性を家やテントに、伝統的役割に閉じこめるのは、人間の社会に他ならない。定住化した人々だけでなく、『歩く人々』で祖母がノスタルジックに語る遊牧民の社会も、この点は変わらない。空間や移動そのものは必ずしも自由を意味しないのである。また、女性を閉じこめることに情熱を傾ける社会はしばしば男性にも、定められた役割からはずれることを許さない。砂漠が自己解放の契機となるには、そこに生きる共同体の枠組みの外に生まれ、その法に縛られていないことが第一条件なのである。砂漠は、そこを離れる可能性を持つ者にとってのみ魅力的なのであり、「そうと決めた時に去っていけることを確信する彼ら(フランス人派遣教師)は砂漠を快適に生きていた。そこを一生離れられないのではないかという恐れからレイラはそれを、砂漠という

61 2002年にアラブ世界研究所で開催されたりビア美術展は「砂漠は静寂ではない」と題され、砂漠イコール沈黙の世界という決まり文句の反語となっている。

62 Entretien avec Dehbia Aït mansour, in *Liberté*, 10 mai 2001, p.11. (Algérie)

専制君主を憎悪していた (HM274)」。モカデムが砂漠について書くのは、砂漠の酷暑と社会的幽閉を逃れて後のこととなる。

砂漠は、しかし、逃走の場ともなりうる。『歩く人々』のレイラは心に傷を受けるようなことがある度に近くの砂丘にのぼるが、それはわずかな時間とはいえ、「砂漠の孤独」を保証してくれる避難所となる。砂丘の描く曲線に女性の身体を見る多くの作家や研究者が、砂漠の中でもとりわけ砂丘を女性的メタファーで語っている。モカデムの場合それはむしろ母性的性格を帯びる。レイラと母との困難な関係については3章で検討するが、『歩く人々』でレイラが逃げ込む砂丘は5回現れるうち3回まで“dans le giron de” (膝元, ふところ) という母性的暗示の強い表現を伴い、その内一回は「母の膝元 (HM 226)」という限定をともなっている<sup>63</sup>。だが、レイラが避難する原因の中には、弟の誕生と両親のあきらかな息子への臍負、強制結婚など、「母」が象徴する伝統のくびきである場合も含まれている。強制的に結婚させられることを恐れるレイラは、いざという時には砂漠へ逃げることに、今度は一時的避難所である近所の砂丘ではなく、それを越えて逃走することを覚悟している。しかし「彼女 (レイラ) は砂漠に厄災をしかみない。彼女の厄災を (HM191)」。なぜなら、砂漠が女性に提供する逃げ道とは死以外ではありえないことをよく知っているのだから。「でも、自由になるには死ぬ必要が本当にあるのだろうか (HM192)」という少女の問いに、砂漠の厄災以外のものを与えようとする試みがモカデムのエクリチュールなのだとすることもできるだろう。なお『イナゴの世紀』で砂漠は、逃亡奴隷ネジュマを元主人から、マフムドをフランス官憲から守る空間としても機能している。

最後に、海と砂漠の関連について指摘しておきたい。海とそれにまつわる

63 砂丘に逃げ込む場面は HM pp.80, 128, 150, 226, 255. このうち上記の表現は80, 128, 226の各ページに現れる。なお, Roux は現実のサハラでは砂地はむしろ少数であるのに対し, サハラを語る言説や写真などでは砂丘や砂地が強調されることを指摘している。

64 98年の『亀裂の夜』は、遊牧民の出身で、文字通り砂漠へと脱出してしかも生き延びた女性を主人公とし、彼女は自立した生活を送るのだが、モカデムの全作中唯一、最後に死ぬ人物でもある。

表現（砂の海、砂丘のうねり等）は砂漠を書く際、最もよく動員される比喻の一つである。<sup>65</sup>だが、海と砂漠は対等の二項として互いに参照し合うのではない。これまでに本章でとりあげた作家を含め砂漠を書く大半のフランス語作家にとって、海の体験が砂漠のそれに先行しており、砂漠が海にたとえられることは多くても、海が砂漠にたとえられることは稀である。これに対し『イナゴの世紀』で、まだ海を見たことのないヤスミンに説明するのにマフムドは砂漠を比喻として用いる。砂の海ではなく「静かな水の砂漠（HM 164）」であり、「砂漠の風が砂を巻き上げるように海の風も水を打ち、かき回し、怒りを塩からい泡に吐き出す（HM 164）」のである。しかし、実体験として砂漠が先にあったモカデムも、『歩く人々』や『イナゴの世紀』を書いた時点では海を体験しているところか、海に非常に近い位置にいて（モンペリエに在住しヨットを趣味とする）、『歩く人々』でも海の比喻を用いている。砂漠を憎悪していたという作家にそれを愛することを教えてくれたのは海だという。<sup>66</sup>『歩く人々』から『亀裂の夜』までの全てのテキストに砂漠は登場する。『ンジド』は、初めて砂漠を「忘れた」テキストだといえるだろう。そしてそれは、ほとんど海上で展開する物語なのである。主人公は最後まで砂漠に足を踏み入れることはなく、砂漠はその地域出身の恋人の回想としてのみテキストに姿を見せる。しかし、この主人公は、モカデムのそれまでのどの登場人物にもましてダイナミックに動く「ノマド」でもある。社会的閉鎖性を厄介払いした砂漠が海なのだ。砂漠を他者とするテキストによって初めてモカデムは、自由に動く可能性をもった「ノマド」の女性を書いたのだといえるだろう。（この問題については3章で詳しく検討する。）

65 たとえば Roux も上述の著書で、砂漠、海（mer）、母（mère）がしばしばアナロジーの関係におかれることを指摘している。Michel Rouxn, op.cit., pp.47-55.

66 Entrtien avec Dehbia Aït mansour, *Liberté*, ibid.

## 第2章 女の声と書く女

同時期に書かれた初期2作（『歩く人々』と『イナゴの世紀』）に共通するのは、自然環境であると同時に人の生きる社会としての砂漠世界なのだが、それは文字よりは「声」の優先する場である。しかし、この二つのテキストは、単に口承の世界を文字に写し取っているのではない。両作とも、口承世界に育った少女が持つ、エクリチュールとの特異な関係をこそ書こうとするのである。

ところで、口承性はしばしば女性と結びつけられるのだが、アルジェリア女性作家の仕事进行分析するショーレ＝アシュールはこの同一化の危険性を指摘している。「口承性と女性性の「自然な」結びつきという議論」<sup>67</sup>は伝統的に女性が語り部であった事実に基づくというよりは、女性がエクリチュールに向かないことを正当化するために持ち出される。そこに働いているのは「自然」現象ではなく、書かれた文学はエクリチュールによる女性の公的空間への露出を意味するとしてこれを嫌う社会の意志にほかならない。ショーレ・アシュールによれば、「こうした文脈においては、伝統的な口承の生み出すもののみが「本物」であるという理想化は、女性に対して近代への扉の一つを閉じ、内部—伝統—女性、外部—近代—男性という断絶を再生産する巧妙な方法なのである」<sup>68</sup>。モカデムという「本物」の口承世界出身女性作家のテキストは、この問題を考える上でも興味深い。

口承性は、作家と共同体との関係の考察へと我々を導く。クルジエールの言葉を借りると、「口承性とは一つの共同体に属する複数の個人の記憶から成り立つ」<sup>69</sup>のであり、そこには「源、一族、部族、起源への絶え間ない回帰」<sup>70</sup>がみられる。共同体とどのような関係を持つのかという、マグレブに限

67 Chautlet-Achour, *Noûn*, Atlantica, 1998, p.30.

68 *ibid.*

69 Armelle Crouzières-Ingenthron, "Histoire de l'Algérie, destin de femmes: l'écriture du nomadisme dans *Les hommes qui marchent*", in Helm *op.cit.*, p.151.

70 *ibid.*

らず、多くの旧植民地地域出身の作家たちにつきまとう問題はとりわけ女性作家の場合鋭く現れる。書かない、あるいは書けない語り部の女たちを代弁するのは彼女たちであるとされるからである。フランス語で書くグアドルーブ出身の黒人女性作家マリーズ・コンデは彼女に寄せられる「市場の女性たちの期待」<sup>71</sup>を十分に知りながら、しかし、「エクリチュールは口承性の埋葬」<sup>72</sup>であると断言し、「任務の追及は別の仕方でおこなわなければなりません。口承を別の形で引き継がねばなりません」<sup>73</sup>と言う。モカデムのテキストはこの任務をどのように果たすのだろうか。

## 2-1 祖母の語り

『歩く人々』のゾフラの語りはモカデムの第一作を開くのみならず、「砂漠の娘」の想像力の基底をも成している。ところで、それは「何を」語っているのだろうか。

ゾフラは生涯のほとんどを遊牧民として生き、晩年になって定住を余儀なくされる。「私たちはこの人たち、歩く人々の末裔なんだよ (HM12)」という彼女が、孫娘レイラを始め、定住後に生まれた第一世代の子孫に語るのは、何よりもこの歩く人々の世界である。そこでは、絶え間ない移動そのものが生を形作る。動きがあり、痕跡は残らない。しかし、注目すべきは、ゾフラのお気に入りの話とされ、冒頭部分のテキストとして現れているのが、まさにそのノマド世界から逸脱した男の物語であるという事実であろう。ゾフラの夫の叔父ブハルファは、「痕跡」を選んだことで、決定的にこの世界の枠をはずれてしまう。無限に広がるかのように見えるノマド世界の、見えない境界線の一つがそこにある。ブハルファは偶然目にしたエクリチュールとその可能性に取り憑かれ、一族で初めて文字を通じた教育を受けるが、都市の

71 マリーズ・コンデ、三浦信孝編訳『越境するクレオール マリーズ・コンデ講演集』、岩波書店、2001年、65ページ。

72 同上、103ページ。

73 同上。



悪影響を恐れた一族の意見で遊牧生活に引き戻される。しかし、結局彼は二度と、歩き続ける人々の生活に再適応することはないだろう。一族に追放されたブハルファは、今度は、彼らの歩みとは異なる道筋の放浪をたどることになる。

ゾフラの顔に、貧者の宝石と彼女の言う入れ墨が刻まれてあるように、『歩く人々』の読者にも彼女の語りが彫り込まれていくのだが、しかし、この小説全体の語り手はゾフラではない。匿名の語り手が三人称で展開する物語の主人公はゾフラの話の聞き手、レイラであり、テキストの最後は彼女がゾフラの語りを含めて自分の物語を書こうとするところで終わる。つまり、『歩く人々』は砂漠の語りそれ自体ではなく、それを聞いて育った孫娘によるエクリチュールへの変換、それがいかに可能となったかを語る物語に他ならないのだ。定住生活を嘆くゾフラは歩みを語りに変える。

「定住民の不動性。これが私の足をつかんだ死なんだよ。それが私から探求を奪ってしまった。今じゃ私には言葉のノマディズムしか残っていない。」(HM 11)

レイラは祖母とブハルファの両方を、言い換えれば語り手と登場人物の両方を引き継ぎ、実演する者となる。砂の上の歩みを、エクリチュールの流れにすること、それがレイラの探求となるだろう。

『歩く人々』は自伝的要素が強く、このように、モカデムが作家となる条件が世代を越えて準備される様をも語っているということが出来るのだが、名前をはじめあくまで自伝とは距離をおいたフィクションである。ゾフラの言うように語り部というものが「あらゆるものを手玉に取る。自分自身の物語だって (HM 12)」としたら、モカデムは祖母の教えを忠実に実行することによって作家となったといえないだろうか。

## 2-2 砂に書く娘

『歩く人々』は砂漠の縁の村を主な舞台とし、遊牧民はゾフラの語りの中から、村に給水のために立ち寄るキャラバン以外に登場しない。しかし、同時期の『イナゴの世紀』は現役の遊牧民の物語であり、またゾフラの語りを含みながらもリアリズム小説である『歩く人々』に比べ、ファンタスティックな要素をそなえている。それはまた、口承の世界とエクリチュールとの葛藤が女の身体を通じて表現されるテキストでもある。

中心となるヤスミンとその父マフムドの二人は共に、何種類もの両義性を担う人物である。マフムドは語り部であると同時にエクリチュールの保持者であるが、詩人と呼ばれる彼は、一部の男からは「女みたいに一日中ばかなおしゃべりにふけている奴 (SS 14)」と軽蔑される。しかし、実際マフムドは、妻の死後一人で娘を育てる父にして母という両性的役割を果たしている。また、部族の要請に忠実であろうとして結局社会からの逸脱を余儀なくされる（父の遺言に従って祖母の遺骨を探しにいったことからフランス人植民者殺害の濡れ衣をきせられてお尋ね者となる）。さらに、虐殺された妻の復讐を果たさねばという強迫観念と、そうした伝統的価値観に対する嫌悪に引き裂かれてもいる。

一方、娘ヤスミンは黒人の母とアラブ人の父との間に生まれ、どちらでもないものと他人がみなす二重性を持っている。しかし、この登場人物の両義的性格は外見にとどまらない。母が強姦され殺害される場面の目撃者になった瞬間から、少女は声を失う。母を奪われると同時に、音声言語を奪われるのである。マフムドは話せない娘にエクリチュールを与える。父と娘のこのコミュニケーションは、彼らが孤立した遊牧生活を送っているかぎりうまくいくのだが、社会との接触の場ではたちまち怪しいもの、危険なものに変貌する。マフムドは砂漠を移動する二人だけの生活の中で娘を、伝統的な性別役割分担とは無縁の教育によって育ててしまうのだが、それは織物をはじめ女の仕事が一切できない上、口承性の支配する世界で話さず書く女というき

わめて例外的な存在を生み出すのである。

ヤスミンはたしかにパロールを持たないのだが、パロールに、とりわけ父の物語る声にするどく反応する。

「彼女が体全体で打ち震えるのは、言葉の響き、音によってである」  
(SS 165)

ヤスミンは、口承性に深く根ざした感性を持たないわけではないのだ。その少女のエクリチュールは砂の上に始まる。比喩ではなく、紙が貴重な世界にあって、文字どおり砂上に指で跡をつけることによって書くことを学んでいくのである。この砂上のエクリチュールは、次の瞬間には消え去る可能性が高く、ほとんど音声と同じぐらい「はかない」。むしろ、エクリチュールとパロールの中間的形態なのだといえるかもしれない。この書き物に、より堅固な支えを与えるのは、書く民ユダヤ人のベニシューである。紙の贈与によって彼はヤスミンのエクリチュールの庇護者ともなる。とりわけ、ヤスミンの異質性が彼女を困難な立場におく時、それは貴重な行為となる。

書く娘の異質性が際だつのは彼女が共同体の内部にあるときである。暗殺者を追う父は娘を遊牧民のハマニー族に預けるのだが、ここでの生活を描いた部分は、ゾフラが郷愁をこめて称揚した遊牧民の世界で、女たちがどのように生きているのかを具体的に示してみせる。ゾフラの語らなかった女の生の現実は、『イナゴの世紀』において、ヤスミンの目を通して観察と批判の対象となる。そこでは女の従属的位置や仕事は厳密に規定され、黒人でも白人でもなく、男でも女でもないあいまいな存在など許されない。ヤスミンが逃げ出す直接のきっかけとなる低年齢での強制結婚は、女たちの人生に選択肢が存在しないことを象徴する。この状況下で、話さずに書く娘が、不幸をもたらす存在として危険視されるのはむしろ当然の帰結であり、彼女の異様さを矯正する唯一の手段が結婚なのである。

『イナゴの世紀』は父娘が、それぞれ別に、しかし双方とも伝説的人物となって物語の中に消えることで終わる。性別によるモデル、とりわけ女のそれをはみ出す可能性は、現実のノマドの世界には存在しないかのように。

### 2-3 母とモデル

最も単純化して言えば、モカデムの描く伝統社会において女はその母のように生きることを求められる。ところで、モカデムの作品世界においてはまさにその母というモデルが問題となる。

『歩く人々』と『イナゴの世紀』はそれぞれ、非常に異なる「母」を描いている。自伝的要素の強い前者のそれは13人の子を持つ。伝統的価値の保持と伝達を担う人物としての「母」と、そこからの解放を求める「娘」との対立は、アルジェリア文学に限らず現れるクラシックな構図だが、『歩く人々』のそれは異彩を放っている。激しい非難の対象になっているのは、子を産むという「母」の最も基本的な機能そのものだからである。もっぱら13人兄弟の第一子レイラの位置（そしてそれはモカデム自身の位置に重なるのだが）から描かれる母ヤミナは、長女の記憶に有る限り常に妊娠している「子供工場（HM 116）」である。この多産、とりわけ数多い息子は「腹のおかげでようやく存在し始めた（HM 116）」ヤミナ自身には、婚家での立場を強めてくれる僥倖に他ならない。彼女は「腹の戦いの勝者（HM 140）」なのだ。その豊饒がレイラにとって許し難いのは、「やさしいことばは男の子にのみとおかれた。レイラは母から命令と叱責しか受けたことがなかった（HM 115）」からだと説明することもできる。母の愛情を弟たちに奪われたのみならず、「私は4歳の時から家事育児を担う小さな主婦でした<sup>74</sup>」というモカデム自身の言葉からもうかがえるように、子供時代を享受することも難しかったからこそ母性批判であることは間違いない。しかし、『歩く人々』のテキストが放っているのは、こうした心理的説明をも越える激しいエネルギーであり、

74 Interview par Youcef Zirem, in *Le Quotidien d'Algérie*, le 28 juin 1992.

それは怒りや嫉妬というよりは、過剰な産む性への恐怖とすらいうことができるかもしれない。思春期のレイラが陥る拒食症もまた、一つの社会が要求する「大人の女」モデルに合わせて成長することを少女が拒否する手段としてよく知られているが、レイラは、「信念というよりは悪魔払い (HM 253)」の呪文として「私は絶対に子供はつくらない(HM 253)」という。

産む身体を拒絶してレイラが逃げ込む先が書物である。『イナゴの世紀』のヤスミンが話すかわりに書くとしたら、レイラは食べるかわりに読む。植民地支配下の教育がもたらしたフランス語を利用して本をたてに、彼女は矢継ぎ早の母の命令から身を守ろうとする。フランスが植民地支配下のアルジェリアの人々にもたらした教育をめぐっては、この時期に教育を受けたフランス語表現作家の作品の多くに繰り返し書かれ、伝統社会との断絶や社会的上昇、また独立を準備する思想の形成という点でも重要なテーマの一つを成している。<sup>75</sup> ジェバールをはじめとする女性作家も、支配者によるものとはいえ、この教育が女性解放の契機としても機能したことを語る。モカデムは『歩く人々』において他の女性作家よりはるかに「形而下」レベルのせっぱつまった状況におけるこの「解放」を書いている。たしかに極度の貧困や飢えという状況はない。レイラの家族は貧しいが13人の子供に食べさせることができるのであり、拒食症になれるのは飢えていない者だけである。4歳からの家事育児負担も、貧しい社会では決して特殊な例ではないかもしれない。だが、アルジェリアのフランス語表現文学において、「母性」が、産みすぎることを直接批判され、フランス語（とそれによる学校教育）が、豊穡すぎる母性の犠牲者を救う「救命板 (HM 125)」として描かれた例は多くはない。フランスの武力に倒れるアルジェリア人が続出する戦争下で、産み続ける腹は支配者に対する勝利を意味するというゾフラの言葉もあるのだが (HM 99)、このテキストの全体を貫き、読者に消しがたい印象を残すのは、むしろ、こ

---

75 たとえばこの文学の嚆矢となる作品の一つムールード・フェラウン『貧者の息子』では、まさにこの教育の経験が中心的テーマとなっている。

の「ナショナリスト」的一節の説得力を無効にしてしまう激しい母性拒否の方であると言わざるを得ない。

母の多産を拒絶する最も簡単な方法は母自体を消してしまうことかもしれない。『イナゴの世紀』は冒頭にヤスミンの母ネジュマの殺害場面をおき、乳飲み子の弟も、命名されるひまもなく同時に消える。不在となって初めて母は娘の同一化の対象となる。レイラが母に似ることを断固拒否するのと逆にヤスミンは「母にそっくり (SS 13)」とされるのだ。ネジュマが黒人で奴隷身分からの逃亡に成功した人物であることも注目に値する。『歩く人々』には、黒人に差別的な子供に向かってゾフラが、一族の祖先には黒人女性もまじっているのだといさめる部分がある (HM 160)。レイラにはこの祖先からの遺伝が、両親より濃く現れているのに対し、母ヤミナは黒人に対してもユダヤ人に対しても差別的である。『歩く人々』と『イナゴの世紀』が同時に書かれたことを考慮するなら、母の黒人性を全面的に引き受けることは、ヤミナの差別への間接的応答であるということもできるだろう。<sup>76</sup>

他の作品においても、中心人物は主に「娘」として描かれる人物だが、その母はすべて不在である。「娘」として描かれていない唯一のヒロイン『亀裂の夜』のヌールが、不妊故に離縁された女であることも興味深い。不在はいくつかの異なった形式を持っているが、<sup>77</sup>皆、ヒロインがごく幼い頃に姿を消し、娘は母の記憶をほとんど持たない。この不在は、圧倒的な産む母の拒絶であると同時に、娘にとっての同一化モデルの不在をも意味している。『歩く人々』の一節は母に代わるモデルの可能性を次のように表現する。

「いつか、アルジェリアの全ての女性たちがサアディアおばやベン  
スサン先生やラ・ベルナールのように生きる日がやってくるだろう。」

76 なお、モカデム自身もレイラと同じ身体的特徴の持ち主である。

77 『追われた女』では『イナゴの世紀』同様母は殺され、続く『夢と暗殺者』では、非合法の中絶の結果命を落とす。ここまでの母は不可抗力によって姿を消すわけだが、『亀裂の夜』ははじめて自らの意志で娘を捨てる母を描いている。

未来のアルジェリア女性のモデルの内2人（ベンスサンとラ・ベルナール）がフランス人であることを指摘しなければならないが、ここで問題になっているのはもちろん彼女たちの職業（教師と助産婦）である。出自とは関係なく、この二人は自立と他者への貢献という視点から高く評価される<sup>78</sup>。サアディアおばはおそらく『歩く人々』の中でもっとも劇的な人生を生きる登場人物である。少女時代に強姦された彼女はすでに、犠牲者が断罪されるという不条理を認識しており、父に殺されないために逃亡する。その後も、様々な暴力の犠牲となり、娼家にとらわれて搾取され続けるが誇りを失うことはなく、強靱な意志と、彼女を愛したフランス人男性の介入もあってついに自らの解放に成功する。紆余曲折を経て再びレイラの一族に受け入れられたこの女性は、その後も洗濯業で自立し、周囲の男性からも一目置かれている。いったん社会から完全に排斥されながら自らの力で自由と尊厳を獲得した女性が一族の中におかれることは、現在は困難な状況にあるアルジェリア女性の未来の展望を開くものとして、フランス人モデル以上に貴重な存在である。しかし、モカデムの作品世界全体を見渡すと、第一作のこのモデル以上に肯定的なアルジェリア人女性は現れていない。多くのサアディアはいまだ、自らを解き放ってはいないのである。

ここで、モカデムが『イナゴの世紀』に書き込んだもう一つの「モデル」を指摘しておかねばならない。「この名を聞くと血のつながりのやさしい夢が彼女（ヤスミン）の理性を包み込む。一人の女が歩き、書く夢が（SS 165）」とされ実名で引用されるイザベル・エベルハルトである。アラブ人男性の外見を選んだこの二重の異装者は、実際、モカデムの生地<sup>79</sup>に立ち寄ったことが

---

78 ラ・ベルナールは、レイラを取り上げた助産婦だが、歓迎されなかった女の子の誕生を唯一ユーユー（北アフリカの女性が喜びや祝意を表す時に発する独特の叫び声）で迎えた人物である。また、ベンスサンはレイラを励まして教育による未来を開いた教師。

あり（1904年）、その直後、近くのアインーセフラで濁流に呑み込まれて死亡する。同じ場所を歩いたことと書く女であることの二つが、ヤスミンの「同一化という奇妙な欲望（SS 165）」を突き動かすのだが、彼女の方が一方的に「ルミナ<sup>80</sup>」に近づくのではない。「乳白色の月の晩には、イザベルは母の黒檀の肌を持ち、自らの物語を語るために父の技量を持つ（SS 238）」と、モデルの方がヤスミンに引き寄せられる。エクリチュールを介した想像上の血縁が、母の身体をまとめて娘に継がれるのだ。これはまた、フランス語という「他者の」ことばを書く作家が自ら生み出す「血縁」のメタファーでもあるだろう。

#### 2-4 困難な連帯—書く女の位置

『イナゴの世紀』のヤスミンはモカデムのヒロインの中で最もその「書く」行為が問題となる登場人物だが、彼女は声を失うことと引き替えにエクリチュールを獲得する。上に見たようにそれは、彼女を取り巻く共同体との間に軋轢をもたらす。そこから逃げ出したヤスミンは父の死の知らせをきっかけに歌というかたちで声を取り戻し、彼にかわって放浪の吟遊詩人となることが暗示され、テキストはリアリズムの外に出たところで終わっている。エクリチュールは、口承世界からの排除という条件でしか可能ではないのだろうか。あるいは、書くためにはいったん声を失う必要があるのだろうか。

エッセイ集の一つを『私を包囲する声』と題しているジェバルをはじめ、多くのアルジェリア女性作家が、書く女と彼女を取り巻く女たちの声との間の断絶を鋭く認識しつつ、コンデ言うところの任務を自らのエクリチュールの存在意義としている。モカデムもこうした「使命」に無関心なわけではない。初期2作はともに砂漠もしくはそれに接する社会にあって、書くこと或いは読むことで周囲から孤立する少女の物語であり、出身世界とのつながり

79 マフムドは娘にエベルハルトの話をし、アインーセフラの墓に詣でる。

80 キリスト教徒の女性を意味するアラブ語。



を積極的に肯定するインタビューなどからもそれはうかがえる。しかし、この作家の独自性は、包囲する「声」との関係の難しさ、あるいはマルタ・セガラが多くのマグレブ女性作家に認められるとする「抑圧された女性たちの共同体からの分離と、それへの同一化との間の未決定状態<sup>81</sup>」を、書く側（浮き上がったエリートにならざるを得ない）の問題としてのみはとらえないことにある。あえて言うなら、「声」の側の「暴力」もまた、作家の位置の「居心地の悪さ」の原因としてモカデムのテキストには書き込まれるのである。フランス語によるエクリチュールという、「声」からの二重のずれについては次章で検討するが、その前に、モカデムのヒロインが例外なく持つ共同体との軋轢をもう少しわしく見ていく必要がある。それは、「第三世界」出身の女性作家に読者が期待する、書かない女性たちの代弁者という役割にこの作家のテキストがどのように答えているかを探る作業にもなるだろう。

実際のところモカデムは、家族内の母—娘関係にとどまらない、ヒロインたちの社会との関係の問題を様々に描いている。『追われた女』におけるイスラム原理主義批判の激しさがよく指摘されるが、モカデムはむしろ、女性に対する抑圧が、90年代に始まるわけでも、過激イスラム主義者の専売特許でもないことをすでに第一作から書いている。

独立直後、ヨーロッパ人植民者たちが去ったあとの空き家に住みついた人々が最初にしたことは、ありとあらゆるあり合わせの材料で低すぎる壁を高くし、窓を塞ぐことだった。こうして「アルジェリア人は離れ業をやったのけた。一ヶ月で最も美しい地区をスラム街に変えてしまったのである！（HM 246）」。もちろん、女を隠すために。このエピソードが語るのはもちろん美学的問題だけではない。

「独立の翌日、男たちの最初の心配ごとは、相も変わらず女を隠

---

81 Marta Segara, "Paradoxe et ambiguïté dans *Le siècle des sauterelles*", in Helm, op.cit., p.191.

し、閉じこめることだった。自由，結構，しかしみんなにというわけじゃない。急いで秩序を取り戻し，伝統を主張して，これ以上女たちが有頂天になったり，とやかく言ったりするのを許してはならなかった。」(HM 246)

独立戦争中にわずかばかり広がった女の自由の領域はあつという間に縮んでしまう。あたかも，そんなものは一度も存在しなかったかのよう。

さらに，武装蜂起記念の祝祭の場での男たちの集団的暴力はレイラとこの社会との間に決定的な深淵をうがう。広場に集まった女たちの中で唯一ヴェールを付けていなかったレイラと妹は，男たちの，からかいやののしりに始まり肉体的攻撃に至る暴力の標的になるのだが，その際二人は女たちの集団の方へ助けを求めて近づく。しかし，ヴェールで身を固めた女たちは受け入れるどころか「こちらにはちゃんとした女しかいないんだよ (HM 286-287)」と追われる少女たちを暴徒の方へと押し返す。ほとんどの言葉が，興奮した男たちの暴力を描いているこの場面で，ほんの数行挟み込まれたこの排除の身振りは，しかし，レイラを決定的に「異なる者」の側へと追いやる一撃でもある。この夜のエピソードは，『歩く人々』の中でも最も激しく暴力的な箇所の一つだが，この後小説は簡潔に語られるゾフラの死に始まる1章を残すだけである。この暴力によってレイラが「この国における最後の希望が今崩壊したのだと感じた (HM 293)」のみならず，テキスト自体がここで破裂し，後にはばらばらの断片が散らばっているかのようである。その最終章は，レイラのリセから大学での生活と相変わらずの抑圧を，短く，そこから一刻も早く抜け出す必要に追われるように語り，彼女を，最終的に「向こう側」へと送り出す。レイラは，かつて望んだ遊牧民に合流するのとは逆の方向，北へ向けて海を渡るのである。

両親や周囲が非識字者である環境で育つ子供が読み書きの能力を身につけた時におこる力関係の逆転という視点からショーレ・アシュールはモカデム

とディケンズを比較する<sup>82</sup>。しかし、モカデムの場合、この能力を持つのが女の子であることも手伝ってか、ショーレ・アシュールの言う周囲からの優越というよりは、異分子の烙印を受け共同体から排除されるという負の働きが、自立をもたらすという肯定的側面と少なくとも拮抗しているように思われる。モカデムは、『歩く人々』、『夢と暗殺者』、『追われた女』の3作で、伝統の枠を越えて高等教育を受けた最初の世代の女性たちを主人公にしているが、大人になった彼女らを、形を変えた排除が待ち受けている。独立後、一定の自由が存在した大学に70年代からすでに逆風が吹き、左翼に対抗するイスラミズムの潮流が勢力をのばしてくる。社会主義を標榜する権力自身も、イスラムを権力維持に利用することをためらいはしない。1984年のきわめて保守的な家族法制定に至る過程は、すでに70年代の女子学生たちに対する自由の制限と監視という形でも現れている。モカデムのヒロインたちはそれでも、キャンパスに恋人を見つけ、弾圧をかいくぐりながら愛を育てる。少なくとも、そのつもりである。卒業と同時に相手の男が、母親の選んだ伝統的な娘と結婚してあっさり彼女らを見捨てるまでは。女を使い分けるのは、この時代のアルジェリア人男性に限ったことではもちろんない。しかし、最初のパートナーと結婚できなかった女性にこの社会が用意する扱い、またこの若い女性たちにとって国の未来と自分の人生の展望が重なっていることを考慮するなら、こうした「裏切り」が、個人的感情問題にとどまらないことは明らかである。エクリチュールへの、さらにはヨーロッパからきた近代知へアクセスはたしかに女性に、今までにない自由と自立の可能性を与える。だがモカデムのこれらのテキストは、自由の喜び以上に、裏切りや排除に対する怒りに満ちている。

むしろ「犠牲者」の位置におかれたエリート女性と、彼女を追い出した社会、とりわけ女性たちとの関係を考える上で興味深いのは第3作『追われた

---

82 c.f. Chaulet-Achour, "Le corps, la voix et le regard; la venue à écriture dans l'oeuvre de Malika Mokeddem", in Helm, op.cit., p.211.

女』である。ヘルムの論集に一文を寄せたアルジェリア女性作家ガニア・ハマドゥはその中で『追われた女』と『夢と暗殺者』の2作を、政治的あるいは社会的批判のディスクールの優先した、文学的価値の低い作品としてかなり辛辣に評価している。<sup>83</sup> 93年と95年に発表されたこの2作は台頭するイスラミズムの横暴に対する怒りに貫かれており、たしかに政治パンフレットの側面が否めない。とりわけ『夢と暗殺者』にその傾向が強い。しかし『追われた女』は、図式的にすぎる面があるとしても、おそらく、作家の明らかな告発の意図を越えるテキストでもある。語りの構造とアイデンティティの問題については次章で検討するとして、ここでは中心人物の一人スルタナと、村の女性たちとの関係を分析したい。

フランスで暮らすアルジェリア女性スルタナは、10代のころに追われるように出た故郷の村に帰る。そこで医師をしていたかつての恋人ヤシンの死を知らされたことが直接の理由だが、この帰郷は過去との和解の試みともなる。数日間の滞在中、スルタナの回想や同じくヤシンの死を聞いて駆けつけた友人アリ、またもう一人の中心人物フランス人のヴァンサンとのやりとりが進行すると同時に、村で権力を握った原理主義者たちのスルタナに対する攻撃もエスカレートする。テキストの後半になって、それまで語られてこなかった村の女たちが実は原理主義者たちのやりかたに憤りを感じており、スルタナの存在がきっかけとなって一部の女性たちが初めて彼らに反して立ち上がろうとする様が描かれる。オルランドは、『追われた女』を分析して「スルタナはすべてのマグレブ女性の代弁者となる<sup>84</sup>」と言い切るのだがこれはテキストからほど遠い解釈と言わざるを得ない。オルランドはスルタナがヤシンの葬儀の後も村に残るのは「苦しむ女たちを支えるため<sup>85</sup>」と述べているが、スルタナが滞在を数日延長することを決めた時点では、村の女性たちとの接

83 Ghania Hammadou, "Réflexions d'une écrivaine", in Helm, op.cit., pp. 234-235. ヘルムの論集でこの点にはっきり言及しているのはハマドゥのみ。

84 Valérie Orlando, "Écriture d'un autre lieu: la déterritorisation des nouveaux rôles féminins dans *L'interdite*", in Helm op.cit., p.107.

85 *ibid.*, p.110.

触はまだ起こっていない。オランダはまた、滞在が数週間に及ぶとも述べているが、テキストから読みとれる期間は5日間である。これらは単純な誤読でもあるが、そこには一貫した傾向が見られる。「帰郷したインテリ女性（スルタナは医師）が、長年抑圧されてきたがついに立ち上がった故郷の女性たちの代表となる」という物語を読みとろうとする期待である。だが、『追われた女』はまさにこうした期待を「裏切る」テキストではないだろうか。

急死したヤシンに代わって診察するスルタナのもとに、何人もの女性患者がやってくる。彼女たちの示す心身症的症状の背後に厳しく抑圧的な生活のあることを理解するスルタナは、客観的に観察する医師である以上に、対象に自己同一化している。村の女性たちの苦しみに対する共感が欠けているわけではない。だが、彼女たちとの関係は、後に明らかになるように別の側面をも持つのである。

スルタナの帰郷はヤシンに対する喪の作業の開始であると同時に、年月を経ても終わっていない両親、さらに自らの過去に対する喪の作業完結の試みでもある。ここで、幼いころに両親をなくしたスルタナの、彼らに関する記憶の欠落部分を埋めてくれるのは、当時を知る年長の女たちの話である。従って、モーティマーの言うように「女の集団的記憶で過去の再構築に成功する<sup>86</sup>」というかたちが認められる。しかも、その集団的記憶が強調するのは、社会的成功にもかかわらず不安的なスルタナの自己評価を高める要素、つまり彼女が父に非常に愛された娘であったということである。息子より価値の低い娘に対する愛情をみせびらかすことをもためらわなかったこの父のふるまいは、村人の目には異常に映る。妻への愛もまた、嫉妬妄想から彼女を殺すというドラマを引き起こすまでに強い。スルタナは、愛の欠如<sup>87</sup>よりは過剰

86 Mildred Mortimer, "le Désert intérieur et extérieur dans l'oeuvre romanesque de Malika Mokeddem", in Helm, op.cit., p.88.

87 スルタナは両親を失ったことに加えて村八分と追放を経験し、愛の欠如に苦しんだことから、自分を誠実に愛してくれたヤシンをも愛せなかったのではないかと疑っている。なお、この父は村の出身ではなく、外から来て、家族の決めた婚約者があった母と愛情による結婚をしたという、これまた「異常」な設定になっている。

によって「異常」の印を押されるのだが、大人のスルタナを前にして回想する女たちは、それを、恥ずべきこととしてではなく、むしろ、今やぬきんでた位置に到達したスルタナへのオマージュであるかのように語る。それはスルタナを慰撫するものであるが、彼女を味方に引き入れたい女たちによる「下心」でもある。語りはさらに時代を下り、フランス人医師夫婦の庇護下に教育を受け、道を歩けば「売女」という語を投げつけられる村から、敵意に満ちた人々の注視する中、追われるように出ていった日の光景へと至る。ここに来てスルタナは、当時、男たちだけでなく女たちもまた、彼女の生を生き難くするのに手を貸し、誰も助けてくれなかったことを彼女たちに想起させる。皆が皆、スルタナの村八分に同意していたのではない、男たちに逆らってまで彼女を助けられるような力は女にはなかった、というのが今になって与えられる回答である。それは彼女も、また読者をも納得させるとは言い難い。一方でスルタナは、女たちがこの社会で、あるいは家庭でおかれた位置をよく知っている。言い訳めいたこの回答が含む真実をもまたこのテキストは忘れていない。今や、かつて追われた村にとどまり、いっしょに戦ってくれるよう要請されるスルタナは、しかし、最終的に、再度村を出ることを選択する。バシヨルに寄れば、これは「敵前逃亡<sup>88</sup>」に他ならない。スルタナが村の女たちの期待に添わない時、声なき女性の代弁を作家に期待する読者もまた裏切られる。モカデムのこの作品は、何よりも、原理主義と男性中心社会にたいする激しい告発の書である。同時に、そこには、それを書く女の位置の難しさのみならず、期待される者がその期待とは異なる選択をする可能性があることをも書き込まれている。このテキストは「ポストコロニアル状況下の女性作家の作品」を演じながら、同時にそうなることを拒否しているのである。

(続)

---

88 Michèle Bacholle, "Ecrits sur le sable: le désert chez Malika Mokeddem", in Helm, op.cit., p.76.